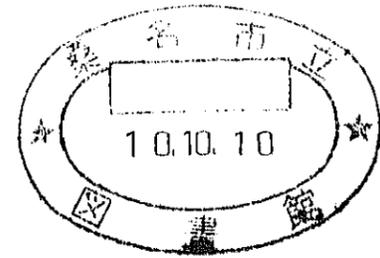


桑名  
日記  
柏崎  
日記  
解題

柏 桑  
崎 名  
日 日  
記 記  
解  
題



謹んで此七巻を

桑名日記の著者 故渡部平太夫政通氏  
柏崎日記の著者 故渡部勝之助政醇氏  
の墓前に捧げ、

両日記の温存者 故伊東富太郎翁の靈前に供え奉る。

澤下春男  
同 能親

目次

序	凡例	解題	一、桑柏両日記の成立について	二、桑柏両日記の相伝について	三、主要登場人物とその統柄等について	I 渡部家	(イ) 渡部家系譜	(ロ) 桑名八幡瀬古庚申堂北の平太夫一家	(ハ) 平太夫政通	(ニ) おば	(ホ) 鎌之助	(ヘ) おなかとおすみ	II 柏崎陳屋の勝之助一家	(イ) 勝之助政醇	(ロ) おき	(ハ) おろく	III 桑名の片山家	(イ) 片山家系譜	(ロ) 均平とおてつ	(ハ) (理助)	IV 桑名新屋敷の佐藤家	V 柏崎勝之助をとりまく人々	(イ) 御向(隣)の竹内家	(ロ) 柳橋のおゆき、ば、久治	(ハ) 陳屋の面々	四、桑柏日記比較等	附録 (時刻(トキ)早見表等)	
1	2	3	3	8	13	14	14	15	15	15	15	15	17	17	17	17	18	23	23	23	25	26	26	26	26	26	31	33

序	1
一、桑名藩の歴史概観	2
二、桑名藩の政治概観	3
三、桑名藩の文化概観	4
四、桑名藩の経済概観	5
五、桑名藩の教育概観	6
六、桑名藩の宗教概観	7
七、桑名藩の風俗概観	8
八、桑名藩の人物概観	9
九、桑名藩の文藝概観	10
十、桑名藩の歴史研究概観	11
十一、桑名藩の歴史研究の現状	12
十二、桑名藩の歴史研究の将来	13
十三、桑名藩の歴史研究の意義	14
十四、桑名藩の歴史研究の結論	15
十五、桑名藩の歴史研究の参考文献	16
十六、桑名藩の歴史研究の謝辞	17
十七、桑名藩の歴史研究の索引	18
十八、桑名藩の歴史研究の目次	19
十九、桑名藩の歴史研究の巻頭語	20
二十、桑名藩の歴史研究の巻末語	21
二十一、桑名藩の歴史研究の終語	22
二十二、桑名藩の歴史研究の終語	23
二十三、桑名藩の歴史研究の終語	24
二十四、桑名藩の歴史研究の終語	25
二十五、桑名藩の歴史研究の終語	26
二十六、桑名藩の歴史研究の終語	27
二十七、桑名藩の歴史研究の終語	28
二十八、桑名藩の歴史研究の終語	29
二十九、桑名藩の歴史研究の終語	30
三十、桑名藩の歴史研究の終語	31
三十一、桑名藩の歴史研究の終語	32
三十二、桑名藩の歴史研究の終語	33
三十三、桑名藩の歴史研究の終語	34
三十四、桑名藩の歴史研究の終語	35
三十五、桑名藩の歴史研究の終語	36
三十六、桑名藩の歴史研究の終語	37
三十七、桑名藩の歴史研究の終語	38
三十八、桑名藩の歴史研究の終語	39
三十九、桑名藩の歴史研究の終語	40
四十、桑名藩の歴史研究の終語	41
四十一、桑名藩の歴史研究の終語	42
四十二、桑名藩の歴史研究の終語	43
四十三、桑名藩の歴史研究の終語	44
四十四、桑名藩の歴史研究の終語	45
四十五、桑名藩の歴史研究の終語	46
四十六、桑名藩の歴史研究の終語	47
四十七、桑名藩の歴史研究の終語	48
四十八、桑名藩の歴史研究の終語	49
四十九、桑名藩の歴史研究の終語	50
五十、桑名藩の歴史研究の終語	51
五十一、桑名藩の歴史研究の終語	52
五十二、桑名藩の歴史研究の終語	53
五十三、桑名藩の歴史研究の終語	54
五十四、桑名藩の歴史研究の終語	55
五十五、桑名藩の歴史研究の終語	56
五十六、桑名藩の歴史研究の終語	57
五十七、桑名藩の歴史研究の終語	58
五十八、桑名藩の歴史研究の終語	59
五十九、桑名藩の歴史研究の終語	60
六十、桑名藩の歴史研究の終語	61
六十一、桑名藩の歴史研究の終語	62
六十二、桑名藩の歴史研究の終語	63
六十三、桑名藩の歴史研究の終語	64
六十四、桑名藩の歴史研究の終語	65
六十五、桑名藩の歴史研究の終語	66
六十六、桑名藩の歴史研究の終語	67
六十七、桑名藩の歴史研究の終語	68
六十八、桑名藩の歴史研究の終語	69
六十九、桑名藩の歴史研究の終語	70
七十、桑名藩の歴史研究の終語	71
七十一、桑名藩の歴史研究の終語	72
七十二、桑名藩の歴史研究の終語	73
七十三、桑名藩の歴史研究の終語	74
七十四、桑名藩の歴史研究の終語	75
七十五、桑名藩の歴史研究の終語	76
七十六、桑名藩の歴史研究の終語	77
七十七、桑名藩の歴史研究の終語	78
七十八、桑名藩の歴史研究の終語	79
七十九、桑名藩の歴史研究の終語	80
八十、桑名藩の歴史研究の終語	81
八十一、桑名藩の歴史研究の終語	82
八十二、桑名藩の歴史研究の終語	83
八十三、桑名藩の歴史研究の終語	84
八十四、桑名藩の歴史研究の終語	85
八十五、桑名藩の歴史研究の終語	86
八十六、桑名藩の歴史研究の終語	87
八十七、桑名藩の歴史研究の終語	88
八十八、桑名藩の歴史研究の終語	89
八十九、桑名藩の歴史研究の終語	90
九十、桑名藩の歴史研究の終語	91
九十一、桑名藩の歴史研究の終語	92
九十二、桑名藩の歴史研究の終語	93
九十三、桑名藩の歴史研究の終語	94
九十四、桑名藩の歴史研究の終語	95
九十五、桑名藩の歴史研究の終語	96
九十六、桑名藩の歴史研究の終語	97
九十七、桑名藩の歴史研究の終語	98
九十八、桑名藩の歴史研究の終語	99
九十九、桑名藩の歴史研究の終語	100
百、桑名藩の歴史研究の終語	101

序

昭和五六年の春、還暦定年を迎え、無為徒食するの申し訳がないとて、驚馬に鞭打ち、文字通り、六十の手習をはじめた。即ち天保、弘化、嘉永にわたる十年間、殆んど毎日、書き続けられた勢州「桑名日記」と、桑名藩の飛地であった越後「柏崎日記」全文の活字化事業である。

幸い、長男夫婦の加勢によって、一年有半を費してやっこのこととて、原稿完成にまでこぎつけることができた。桑柏両日記については、既に堀田吉雄翁が、昭和四三年に、「日本庶民生活史料集成」第十五卷(山一書房)のなかで、「桑名日記・柏崎日記(抄)」と題してその抄をものされた。又昭和四四年には、「桑柏日記民俗抄」を著わされて、兩日記の前半だけの抄文を掲げて、たゞに民俗学的分野のみならず、いろいろの角度からの御研究を発表されている。その内容が広範多岐にわたるうえ、史料としての価値がきわめて高いので、非才をも顧みず、こゝに全文の活字化をこゝろみた次第である。広く関係者に対しその研究資料としてこれを提供することを得、いさゝかでも識者御研鑽の一助ともなるならば、幸甚これに過ぐるものはない。

こゝに、原本所蔵者、伊東春夫(三重県桑名郡多度町香取一八八)、関連資料提供者、不破直幹(桑名市新地北六一)の各氏をはじめ、右二氏を含めた桑柏日記研究会々員、堀田吉雄、久徳高文、西羽晃、堀哲、小川通夫、水谷新左衛門の各先生方ならびに柏崎市史編さん関係各位、および兩日記の著者渡部家の御後裔、そのほか御高導御厚意を賜った幾多の方々に対し、深甚の謝意を表するとともに、誤読、解読不能部等の御教示、御叱正を心から御願ひして序とする。

なお、諸般の都合で、全七冊のうち過半を、全くしろうとの筆者どもがタイプを打ったため見苦しい点、読みづらいヶ所が多々できたことを心からお詫びする。

昭和五十七年十一月吉日

澤下春男 謹す。



(概写一)

凡 例

- 一、明らかに書き落し、又は誤りと思われるところは、( ) 又は ( ) をつけて編者共が補った。
- 二、原文には、殆んど句読点が施されていないので、はじめ句読点をつけずに印刷に出した。が、いかにも読みにくいので、途中から訳者共が勝手にこれを施すことにした。
- 三、例えば「サッパリ」という語を表すとき、桑名日記では、多くの場合が「さっぱり」とあり、稀に「さっぱり」とある。ところが、柏崎日記では、多くの場合が、「さつぱり」とあり、稀に「さつぱり」となっている。前者には「さっぱり」、後者には「さつぱり」は皆無である。よって、できるだけ原文に忠実を旨としたが、濁点半濁点については明らかに誤りと思われる部分も多かったので万全は期しがたい。
- 四、虫害で読みとれないところは、(虫)とした。
- 五、解説しかねる字又は部分は、□であらわした。
- 六、例えば、「婦レ夫」とあるのは「夫婦」とした。
- 七、例えば「①」又は「②」で消して訂正されているところは訂正されたもののみを掲げた。
- 八、本文上欄に附記又は補記されたもの、又は別紙に補記されて下欄に貼付されたもの等は、そのまゝ上欄に記すか、適宜本文中に入れた。
- 九、稀に図示されたところもあるが、つとめて写真にして挿入した。
- 十、原本の綴じ込み部で、字の見えないところは、品川正氏

解 題

序にも述べた通り、日記の記載内容等は、きわめて広範多岐にわたることでもあり、すべて読者諸賢の御専門の角度からの御研究にまたねばならないのであるが、たゞ、一足先に読了した者として、兩日記の成立や、日記相伝の由来、主な登場人物とその続柄、そのほか二三の資料等を掲げて解題をこゝろみたい。

一、桑柏兩日記の成立について

桑名日記の著者渡部平太夫政通は、天明四甲辰（一七八四）年、藩主松平定信、楽翁公時代に奥州白川松平藩士片山家に生れ後渡部家を嗣ぐ。文政六癸未（一八二三）年、藩主定永転封の際、桑名に移住し、「この移封に際しての平太夫自筆の詳細な御触留がその孫真吾政敏によって「移封記」として綴られ不破家に温存されている（概写三）」居を矢田河原庚申堂北に構えた。（概写二）

晩年（弘化三年正月）には、御破損奉行格となった（桑四弘 3・1・15）が、終始御蔵（御扶持蔵、御詰蔵等）に勤務。妻おば、（お増、俗称まあさ）との間に、幾人か女子は得たが、男子がなかったらしく、実家である新地の片山家から、その甥にあたる勝之助（柏崎日記の著者）を養子に迎え、同じ藩士である新屋敷の佐藤家よりおきくを娶らせ、柳原の地に新居をもたせていた。

新居では、天保七年十二月八日長子鎌之助が生れる。天保十己亥（一八三九）年正月の御役替で、勝之助が、柏崎陳屋詰を拜命すると、勝之助おきく鎌之助は一旦庚申堂の平太夫宅に引移り、勝之助は、二月廿四日、身重のおきくと鎌之助を桑名の

（東京都豊島区池袋所住、日記に出る品川十四郎の御後裔）が桑名市立図書館に寄贈された影印本で補読した。

十一、例えば桑一天10・3・24は桑名日記一の天保十年三月二十四日の条を、柏中弘1.2.3は柏崎日記中の弘化元年二月三日の条を意味するものとする。

十二、禄高、役職、住所等に関しては、多くは、桑名市立文化美術館所蔵の膨大な分限帳（概写十二同十三）や御家中町割軒別名前覚（概写二）等によるところが多い。これらは一括して、桑名市指定有形文化財になっており、杉山和吉氏の御所有であったが、御他界の後、その御遺族が桑名市へ寄贈されたものである。

祖父母に預けて、柏崎へ単身赴任する。おきくは間もなく（三月十九日）おろくを産むが、おきくは同年五月末日、鎌之助を桑名の平太夫おば、のもとに残して、迎えに戻って来た勝之助に連れられ、おろくとともに、同行米富と計四人で桑名を発ち、六月十二日柏崎に着いた。「この際の道中記も真吾政敏によってまとめられ「旅日記」として不破家に保存されている。（概写四）」

かくて平太夫は預った愛孫鎌之助の人となり等を柏崎に知らすために桑名日記を認め始めることになる。一方、勝之助もそれに応えておきくおろくおよびその後の生れ子の日常生活を桑名の養父母に報告するため、や、おくられて柏崎日記を書き始める。以後十年間、両者とも殆んど欠かすことなく毎日日記を認め、幸便の度毎に、交換しあうにいった。

平太夫は稀に見る筆まめな人で、たゞに渡部家に関するのみでなく、桑名藩政をはじめ、藩士の動向はもちろん、町在の噂等にもいたるまで、ことごとまかに書綴っては柏崎へ通報した。

桑名日記が柏崎に到着すると、勝之助宅では「日記読み」を行うのが恒例となり、それを聞くために詰めかける藩士もでてきた。時としては、桑名に居るよりも桑名の状況がよくわかると驚嘆するものもあつた。桑名日記こそは、柏崎陳屋詰の藩士（ほゞ六十名）およびその家族たちにとっては、御本地に関する殆んど唯一の最新最大のニュース源になった。

一方、勝之助も、（平太夫に催促されて始めたことではあるが）、百里を距てて、氣候風土、風俗習慣を全く異にする越後に関する珍らしい多くの情報を認めては桑名へもたらすことになった。

とりわけ勝之助は、有能の人材であったため、ひとりでも四役も藩務を兼帯していた。即ち陳屋における勘定人（九石三人扶持）として僅か数人の同役とともに、五万石以上もある飛地柏崎の会計事務を分掌していた。ために、不作の年には検見にも出張する。（弘化四年三月廿四日及びその後のいわゆる善光寺地震直後の検見では、その災害実況を詳細にわたって報じてもいる。）

また、公事方も兼務し、強盗、殺人、牢破り等をはじめ、各種地論等（特に難問に限る）の吟味にもあたっている。更に、異国船騒ぎが頻度を増すと、柏崎海岸防備の第一線の直接責任者の一人に任命もされている。さらに又、陳屋の学問所（後、彼の従弟、片山恒齋を通じて、藩主筋から「益習堂」の命名をうく。）の句読指南も拜命して、全藩士に対する総読講（五の日）ならびにその子弟に対する教育にも任じていた。又頼まれると天候地震等の占ひもするという文字通り三面六臂の活躍をしていた。従ってその報するところは、大にしては日本国政、陳屋政治の巨細から、小にしては、大根一本、鱈一尾の値段にまでおよび、話題はきわめて豊富であった。ために柏崎日記も桑名にもたらされると桑名の藩士の間では、日記聞はもちろん、廻し読みが行なわれたり、時としては借り受けて書写をする者さえ現われるに至った。いわば桑柏両日記は天保弘化嘉永十年間の桑名と柏崎の日々新聞たるの観を呈したといっても過言ではない。ところが、平太夫が嘉永元年三月四日の記事を絶筆として、同月七日に急死すると、柏崎日記も同月廿三日の記載を最後に跡絶えてしまうことになった。

平太夫の存命中は、桑名日記が柏崎の勝之助の手元つまり柏

崎に保管されたこと、柏崎日記が桑名の平太夫つまり桑名に保存されたことは、「つかわし候日記大事にいたし候由、此方ニてもだん／＼とじたら、かみかずかぞへて見れば、百四拾三まへあり、中／＼たまるもの也」（桑二、天12・10・17）とあることから論をまたないところである。そして（柏上写二）と（柏下写二）とは、何れも、平太夫自筆のものとは断定して間違いないところであるが、前者は平太夫が柏崎日記の最初の「天保十亥年八月ヨリ」の分を、後者は「弘化三丙年正月ヨリ」最後に至るまでの分を桑名で保存するのに用いていた表紙に違いない。

さて、平太夫が死ぬと、両日記はどうなったのであろうか。これを証する確たる史料は見あたらない。残念ながら、不明というほかはない。しかし、この疑問について、筆者共は、次のように想定してみたがどういふものであろうか。

（一）天保十亥年八月ヨリ、弘化三丙年正月ヨリまでの分を桑名で保存するに用いた表紙に違いない。

（二）天保十亥年八月ヨリ、弘化三丙年正月ヨリまでの分を桑名で保存するに用いた表紙に違いない。

（三）天保十亥年八月ヨリ、弘化三丙年正月ヨリまでの分を桑名で保存するに用いた表紙に違いない。

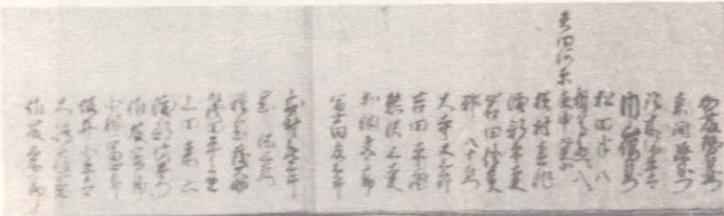
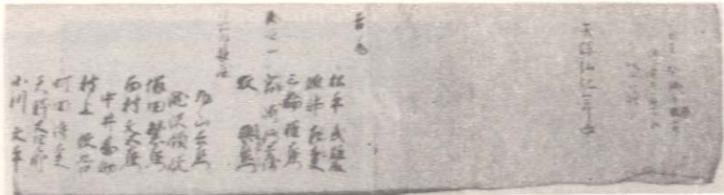
（四）天保十亥年八月ヨリ、弘化三丙年正月ヨリまでの分を桑名で保存するに用いた表紙に違いない。

（五）天保十亥年八月ヨリ、弘化三丙年正月ヨリまでの分を桑名で保存するに用いた表紙に違いない。

天保弘化頃の御家中の住所録



矢田河原庚申堂北の二人目に渡部平太夫の名がある。



（桑名市立文化美術館蔵）

（概写二）

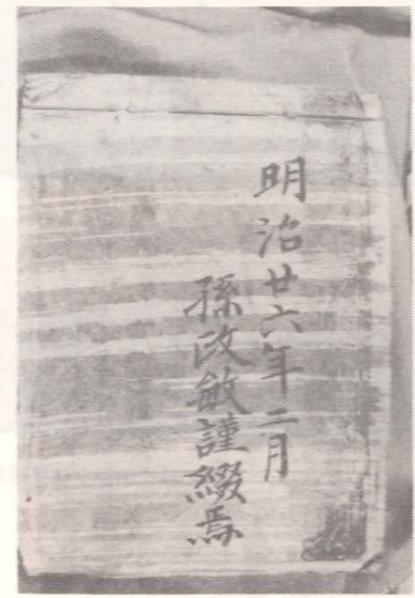
初代平大夫政通の文政六年の白川から桑名への御国替に関する記録を三代目平大夫政敏（真吾）が整備した移封記表々紙（政敏筆）



平大夫政通自筆の表紙



裏表紙（政敏筆）



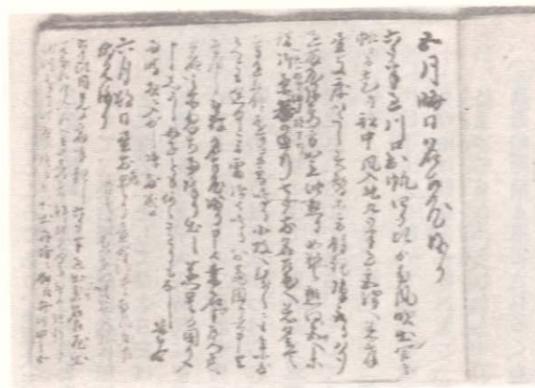
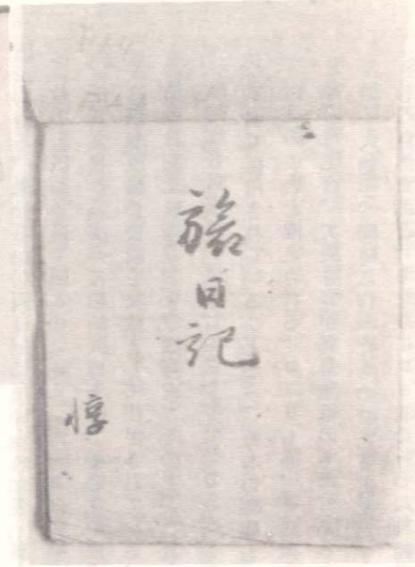
（桑名市 不破直幹氏所蔵）

〔概写三〕

表々紙（三代目平大夫政敏筆）



勝之助政醇筆の表紙



（桑名市不破直幹氏蔵）  
〔概写 四〕

二、桑柏両日記の相伝について

1. 桑名日記は幸便毎に柏崎に届けられてそのまゝ、柏崎において保管されて明治維新を迎えた。
2. 問題は桑名へ届けられた柏崎日記の経過である。結論から申すならば、老平太夫の死後間もなく桑名から柏崎に戻されたと推定するのである。何時、如何なる方法で、誰によって戻されたのかは、これまた全くわからない。が、想像を逞しうることがゆるされるならば、勝之助は父平太夫が死ぬと、間もなく、立寄りか何かのかたちでも桑名に赴き、その際にも柏崎へ持ち帰ったのではなからうか。平太夫が死んで桑名に遺された者は、おは、(五十九才)、勝之助(十三才)、出戻りのおなか(廿二、三才)とその子おすみ(三才)の四人で、勝之助はまだ十三才(呼び)であるから、たとへば扶持、救ひ扶持を賜ったとしても、一家を支えるだけの力は到底ない。かといって桑名渡部家に多くの貯蓄があったとも考えられない。何らかの善後措置がどうしても必要であった筈である。勝之助が養父の急死を知って桑名へ馳せ参じたと思像することはあながち不自然ではなく、この種の例は他にも見受けられる。(桑一、天12・9・5)だとすれば柏崎日記は他見をはぐかる記事少しとしないことでもあり、勝之助が帰柏の際、前述の老平太夫自筆自作の表紙も含めて、柏崎日記をこっそり柏崎へ持ち帰ったと想定することはあながち牽強附会でもあるまいと思われる。

右以外にも、柏崎日記を柏崎へ戻す方法はいくらかも考え

られるところであり、老平太夫の死後、兎にも角にも柏崎日記は柏崎に戻されたものと推定される。

3. かくて、桑柏両日記は共に柏崎において、保存されることになる。そして桑名日記は一、二、三、四の四冊に、柏崎日記は老平太夫時代に使用していた二枚の表紙も含めて上、中、下の三冊計七冊に分けられ、あらためて概写一のような表紙がつけられ、七冊とも同時に綴じられ、同一人物の手で、題名や見返部の目次が書かれたものと推定されるのである。そしてその筆蹟は勝之助の手ではなく、恐らくは、勝之助の二男で、柏崎で人となり、三代目平太夫を継いだ真吾政敏であろうと思われる。という理由は前述の「移封記」「旅日記」その他が真吾の手によってまとめられたものであるが、七冊の題字がその真吾の筆蹟と推定されること(概写二と概写三)からもわかる。果せるかな両日記に用いられた表・裏合計十四枚の表紙および十四本のコヨリ(内一本は後補)がその紙背文書からすべて柏崎陳屋支配下の町在の宗旨(門)人別御改帳の表紙を反故として使用されている。(後掲桑柏日記比較等、および概写五)その上、これらの用紙は何れも嘉永四年から七年までの紀年のあるものが順序不同で使用されていることから、製本の時期も嘉永七年以後のことと推定される。コヨリも亦、その太さ、ヨリのかげ工合、丈夫さ等が異常独得のものであることから同一人物が、同時に作ったものであると推定するのがむしろ自然である。ちなみにコヨリの一つ(柏崎日記下巻に使用のもの)にも、その先端部にホツレがあり、その

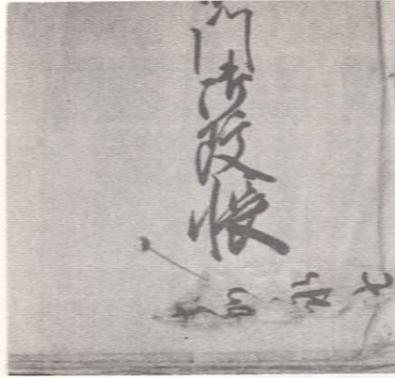
部分に嘉永七年の文字が読みとれる。(概写六)

- とまれこれらのことから、桑柏両日記は、七冊とも、柏崎において、嘉永七年以後のいつの頃に真吾によって一挙に整理され、それに真吾が表書きをし、各巻の見返に目次も真吾が記入したものと推定されるのである。
4. 勝之助(二代目平太夫)が歿すると、両日記は、その跡目を嗣いだ次男の真吾(三代目平太夫政敏精蔵清介柏園)にうけつがれ、引続いて柏崎において保管されることになる。真吾にとっては、両日記、とりわけ柏崎日記は、自らの誕生の最初から七才にいたるまでの、毎日毎日の模様、詳細に書き綴られたものであるので、恐らく後生大事に温存し、繰り返し食読したところであろう。このことは、後に真吾の五女(くら)の婿となった高島量次郎(旧富田中学校漢文教師)の編になる「柏園遺稿」の一部(桑四、写四)によっても容易に想像される。
5. 明治戊辰の役をむかえると、柏崎も桑名同様、錦旗の軍門に降るところとなり、真吾もその家族(妻子及妹てつ)(概写七)とともに、明治元年八月十一日から十三日の間に、帰桑するにいたった。そしてこの時、両日記は、恐らく、真吾によって、桑名にもたらされたものと推定される。(維新日剩纂輯巻四所収「桑名藩家老酒井孫八郎日記」明治元年八月十五日の条、および桑名古典籍刊行会発行「そのてあ」第六号「桑名日記桑名へもどるの日」の拙論参照)
6. 桑柏両日記を持って帰桑した真吾(精蔵)は、明治八年から初代校長として、(同十四年からは補助教員として)

桑名走井学校(現益生小学校)に教鞭をとり(概写八)

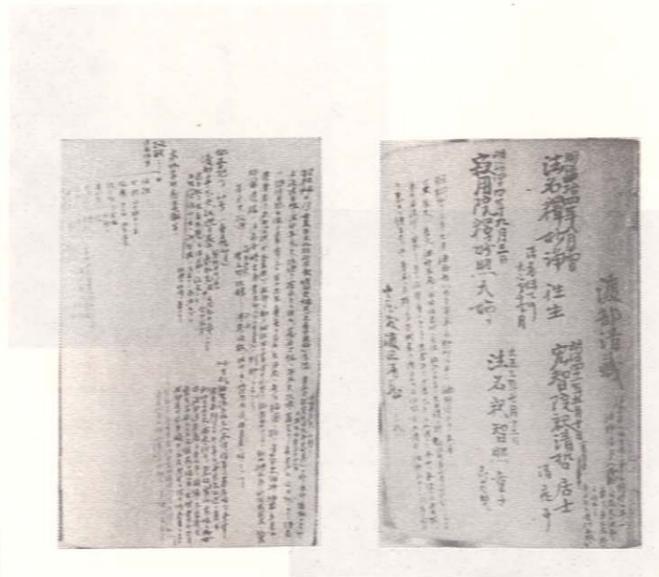
7. 明治四十一年五月十日他界して、祖父老平太夫の眠る桑名法盛寺に葬られることとなる。同寺過去帳に、「法名宏智院積哲居士精蔵の事」とある。(概写七)ちなみに、法盛寺過去帳の追記等によれば、精蔵には五男五女があり、その人々の中には早世された人もあったが、多くは福島県、東京都、対馬、朝鮮、台湾等々に離散され、或は軍人、或は実業家として雄飛され、御子孫は今も各地で御活躍の方も多いようである。

両日記は精蔵(柏園)の後は、何らかの事情により、桑名竹内文平氏の篋園文庫に入り、ついで桑名故平岡潤氏の手を経て、多度故伊東富太郎翁の木綿文庫に収り、「翁御手製の帙も作られた。(概写九)」翁御長逝の後には、御令孫伊東春夫氏が継承されて、昭和四十六年三月十七日三重県教育委員会から文化財指定をうけて現在に至っているのである。(概写十)



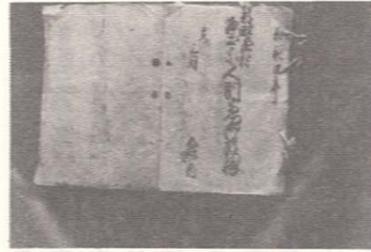
柏崎下のコヨリの  
ホツレの嘉永七の  
字が読みとれる。

〔概写六〕



〔概写七〕

桑名 法盛寺にある渡部清蔵（真吾、柏園）家の過去帳



桑一、表表紙々背

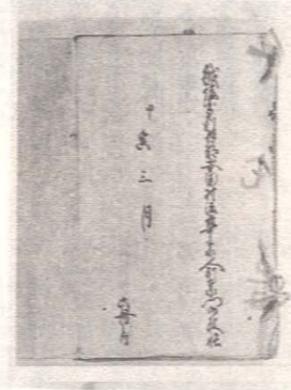


桑四、裏表紙々背

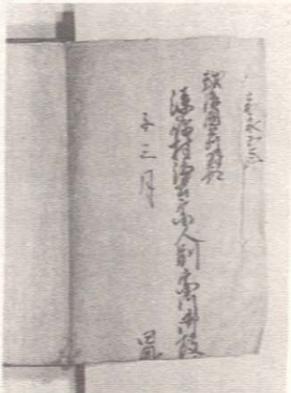
〔概写五〕



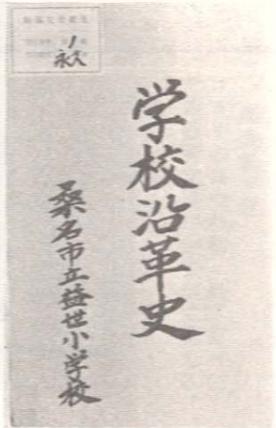
柏下、裏表紙々背  
コヨリのほつれ部（最下部）に  
その紙背文書がかすかに見える。



柏上、裏表紙々背



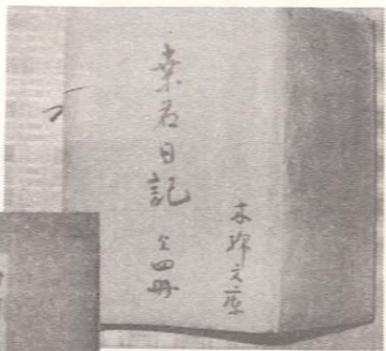
柏中、裏表紙々背



(桑名市立益世小学校蔵)

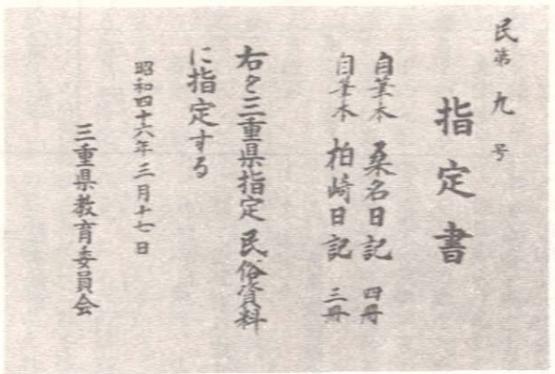


(概写八)



(概写九)

(伊東春夫氏蔵)

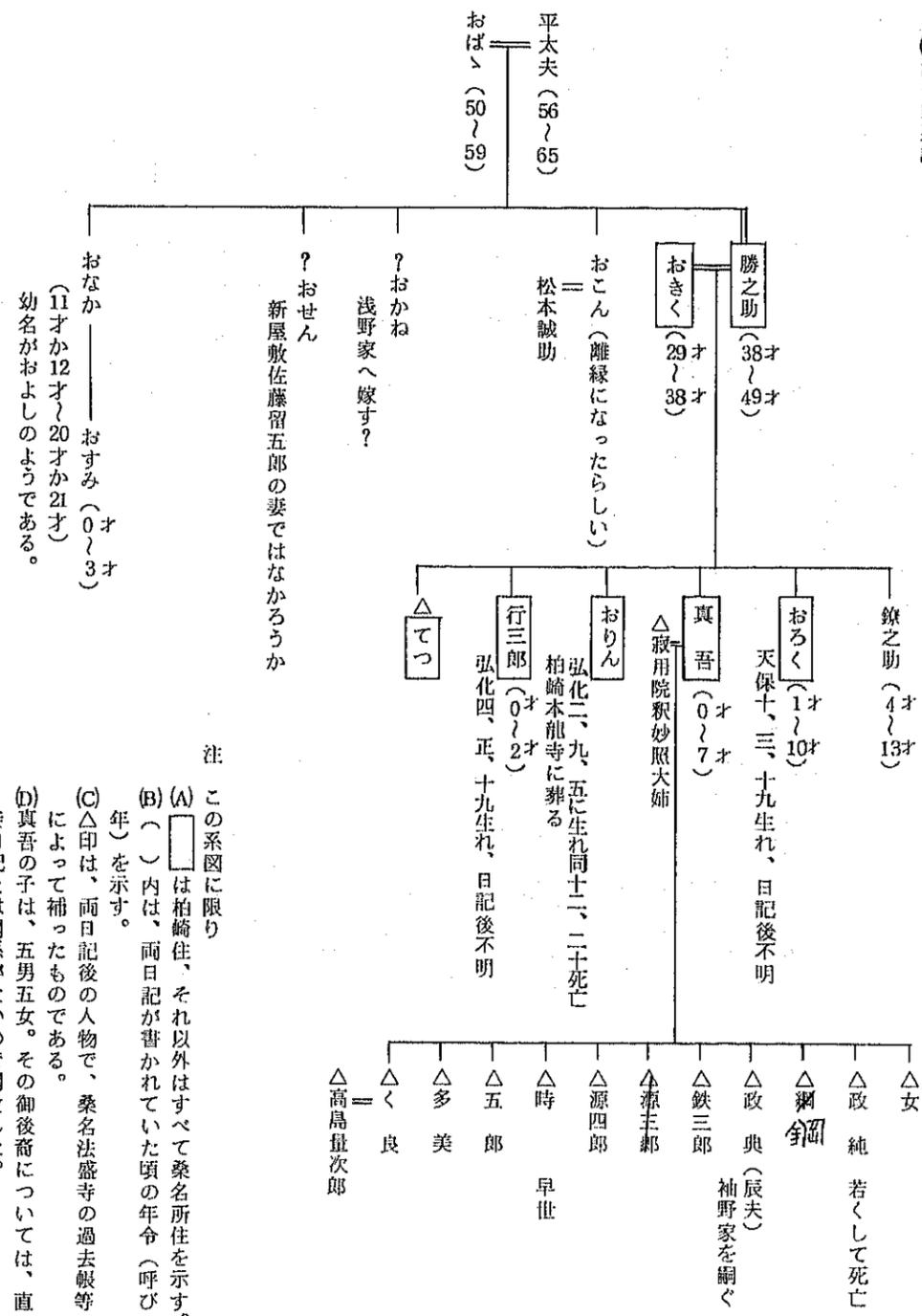


(伊東春夫氏蔵)

(概写十)

三、主要登場人物とその続柄等について  
 初めて読まれる人のために、桑柏両日記に登場する主な人物  
 およびその続柄等について、なるべく重複をさけて、略説する。  
 但し、このことは両日記とも、著者父子の間では互いにわか  
 りきつたことなので、近親者間の続柄等に関する説明は一切省  
 かれてゐる。訳者共が一読してみて推定したところが多いので、  
 誤推も少くないことゝ思う。諸賢の御叱正を賜らば幸である。

渡部家系譜



(ロ)桑名八幡瀬古庚申堂北の平太夫一家

渡部家は、藩中でも旧家の一に属し、旧家十八軒で家業講を組織して、時々会食をしていた。(桑四、弘三・11・25)渡部家では、毎日のように青年男女が集ってきて魚網をすいたり、芋をうむ内職をしたりしていた。渡部家の先祖(或は平太夫の実家の片山家かもしれない)の菩提寺は奥州白川の古刹で現存もする妙徳寺らしい。(桑四、弘二・4・11)

(ハ)平太夫政通

桑名日記の執筆者が誰であるかは、なかなかむづかしい問題であったが、桑一、天11・10・20、桑二、天14・3・7、桑四、弘三・1・15、桑四、弘四・4・25、桑四、弘四・10・22、等所々の記事から、渡部平太夫政通であることが推定される。平太夫の禄高については、前述した多くの分限帳からも終にこれを確認することはできなかった。が、その養子勝之助のそれから逆推して、恐らく九石三人扶持くらいの下級藩士(舞台格)であったにちがいない。御蔵勤務で終始したが、四と九の目が米渡しの日であった。痔の持病ももっていた。若い頃から筆まめな人だったらしく、文政六年御得替に関する詳しい記録「移封記」も残している。(概写三)墓は桑名法盛寺に現存している。(概写十一)

(ニ)おば

佐藤家生えぬきの養子むすめのように思えたが、おなか、浅野家へ養父(養)入にいくところをみると、おばは、浅野家から平太夫の所へ嫁入ってきたものらしい。

注 この系図に限り

- (A) は柏崎住、それ以外はすべて桑名所住を示す。
- (B) 内は、両日記が書かれていた頃の年令(呼び年)を示す。
- (C) △印は、両日記後の人物で、桑名法盛寺の過去帳等によって補ったものである。
- (D) 真吾の子は、五男五女。その御後裔については、直接日記とは関係がないので割愛した。

或は、桑四、弘二・9・7によると、おばの父は松本鉄兵衛なのかも知れない。

桑名日記には毎日のおば、おばとは出て来ない。幸い桑二、天14・1・10、同天14・2・8、桑三、天14・10・9、桑三弘一・8・27、に、僅かに「まあさ」「お増」「お末さ」とでてくるのが本名を示すものようである。吐気の持病があり、ウルユスガの特効薬であった。夫初代平太夫の死後はどうなったか知るよしもない。が柏崎町会所御用留(柏崎市史料集近世編5)文久二年三月朔日の条に渡部平太夫(勝之助)の御老母不幸の記事がある。死亡の場所が桑名なのか或は柏崎であったのかは不明であるが、これがおばだとすれば七十三才まで生存していたことになる。

(ホ)鎌之助

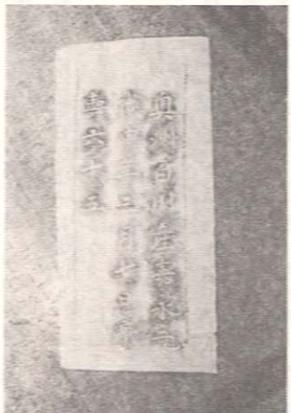
天保七年十二月八日生れと逆算される。家族の関心を一身にあつめた。桑柏両日記の中心人物ともいうべき存在となりわけ桑名日記は鎌之助育児日記といっても過言ではない。弘化元年十月七日、禄之助と改名、同年十二月二十日またもとの鎌之助となる。老平太夫政通が他界した日記後の鎌之助の消息は全く何もわからない。二代目平太夫勝之助の長男でありながら、三代目平太夫を嗣いだのは次男で柏崎に育った真吾政敏(清蔵又の名清介)であった。このことから想像すると早死したのかも知れない。

(ニ)おなかとおすみ

おなかは幼名をおよしと呼んだらしい。桑名日記一では

およしとおなかの名が混用されている。おなかは、日記時代の十年間を通じて、渡部家の重要な家族の一員であった。弘化三年二月廿七日松本家へ嫁すが、兄嫁おきくの実家の佐藤留五郎との間に何かがあったらしくそれが原因で間もなく離婚となり、渡部家に戻り、弘化三年十一月廿二日おすみ（佐藤留五郎の子かも知れない。）を産み、ともに渡部家の居候となる。日記後の行方は母子とも全く分らない。

渡部平太夫政通の墓と碑文。桑名市 法盛寺



正面に向って右側面の銘文

(概写十一)

■柏崎陳屋の勝之助一家

(イ)勝之助（二代目平太夫、諱は政醇、字は中厚、養斎と号す）  
 柏崎日記の執筆者。桑名新地の片山家の出身。享和二年十月十六日白川で片山成美の次子として生れ、文政六年桑名に移り、同十年柏崎詰となる。有能にして極めて廉直。世話ずきでもある。多くの藩務を兼帯する傍ら、赤貧と妻おきくの病身に悩まされつゞける。嘉永四年十一月九日調の舞合格已下分限帳には「九石三人、内老人未ノ（足）、渡部平太夫」とあり（概写十二）、万延元年八月吉日付の分限帳によると「御代官格、柏（崎詰）、九石三人、渡部平太夫」とある（概写十三）。此の頃勝之助は既に五十九才の老境に入っている。柏崎市史資料集近世篇5 柏崎町会所御用留によると、この前年の安政六年八月十五日の条に、「渡部平太夫殿盆前より御病氣ニ付見舞ニ」菓子一折札代金式朱也が町役人から届けられたことが記されている。安政七年には真吾が御番入をしたが、元治元年十二月十二日に、六十三才をもって柏崎に没し、生前親交のあった同地極楽寺に葬られた。  
 （概写十四）

(ロ)おきく（お菊、お喜久、お幾久）  
 柏崎日記の筆者勝之助の妻。柏崎日記には毎日のように多出する人物。桑名新屋敷佐藤家の出身。桑名在住時代は至極健康であったのに、柏崎に移ってから、病に苦しみ通し、赤貧をかこち、嫁之助や桑名の地を恋しがり、なかなか越後にはなじまなかった。日記後のことは全くわからない。

(イ)おろく（於祿、お六）

勝之助、おきくの間を生れた長女。勝之助が柏崎へ単身赴任した直ぐあと、桑名で生れ、生れると間もなく迎えに来た父勝之助と母おきくに連れられて柏崎に着き、以後越後ことばを話す越後人として育つ。柏崎日記の中心人物の一人。身体が大柄の上男装が似合ったらしい。手足の太サや身長等は兄の嫁之助を凌ぐほどであった。美少年の嫁之助を誇りとする老平太夫夫妻は、やゝ嫉妬心も動いておろくが十六、七才にもなると、堅白にコモ巻いたような大ドタ娘になるのではないかと笑い合ったりしている。日記後のことは全然不明である。

(ニ)真吾（三代目平太夫清介、清蔵、政敏、柏園）  
 天保十三年四月十一日柏崎陳屋に生れ、柏崎で育てられ、柏崎日記の中心人物の一人。桑名日記、柏崎日記を夫々、四冊三冊に整理整本した人物であり、そのほか、政通の移封記、政醇の旅日記、も彼の手でまとめられたものであること前述の通りである。自らも「桑名県庁」を著し又詩文等は彼の娘婿高島量次郎によって柏園遺稿としてまとめられている。彼が七才の時、柏崎日記はと絶えてしまうが、柏崎市史資料集近世篇5、安政七年四月十五日の条によると、「渡部平太夫（勝之助）殿御子息清介殿先達中御番入ニ付、祝義」として御肴料金百疋が届けられた記事がある。時に真吾呼び年十九才のことである。それから四年後の二十三才の時父勝之助は他界した。真吾は父の墓碑を、柏崎の極楽寺境内に、慶應元年六月朔日に建立している。（概写十四）

同市史料集5の慶應三年正月元日、同年三月朔日、同年同月廿一日の条には郷手代渡部平太夫の名が出るが、これは既に二十六才になって、三代目平太夫を襲名した真吾のことを言っているのである。慶應四年、戊辰戦役の直後には、藩主定敬中将様が柏崎に上陸、それを追って官軍が来攻する、その官軍を激撃すべきか、それとも恭順の意を表すべきかで、柏崎は未曾有の混乱を来たすことになる。この危急存亡の時に臨んで市史料集5に、これまででは殆んど出なかった渡部平太夫（真吾）の名が、急に多出するようになる。例えば、次の通りである。

十六日（慶應四年壬子四月）晴天 今朝六ツ時御供揃ニ而中将様御義、御預り所加茂町へ御動座ニ付、一統町会所へ相詰御待受申上、御見送り御会釈申上候。星野藤兵衛、西巻荘左エ門、中村雄右エ門、市川房之助、長浜嘉蔵、嘉市、篤之助、記間太、保之丞、岩下、松村、勝田、天屋、高桑等也。尤郷手代渡部平太夫殿御出張御指揮有之候。銘々手札差上申候。御立遅く相成、巳之刻頃ニ相成候。

十八日 ……北條口、妙法寺口、宮川口より追々軍勢繰込ニ可相成ニ付、動揺不致様組々へ申渡……右ニ付渡部平太夫殿御出張有之候……

廿一日 ……又渡部平太夫殿御出張、今日人数繰込は見合ニ相成不来候……

恐らく、平太夫真吾は、自らは恭順派に組して柏崎に踏みとどまり、ともすると動揺し勝ちの住民の指揮に当たることが右の記録によっても察せられる。

そしてこの動乱も一段落した明治元年八月十一日から十三日までの間に、妻子や妹をつれて帰桑し、益世小学校長を勤め、法盛寺に葬られたことは前述のとおりである。その室も明治四十四年九月三日他界して、寂院釈妙照大姉として法盛寺の過去帳に載せられた。（概写七）

（おおりんと行三郎）  
おおりんは弘化二年九月五日に生れ、同十二月二十日早死。雪深い本龍寺に葬られた。

行三郎は弘化四年正月十九日生れ、母おきくが病身で乳不足のため、主として貰ひ乳と摺り粉で育てられたが、よく太り、愛嬌もよく、多くの人から可愛がられ借りまわされもした。柏崎日記下巻の小僧小僧又は行三と続出するのがこれである。日記後は全く不明である。

（つ）

法盛寺過去帳によると、「明治拾年八月十四日、法名釈妙浄往生、精蔵妹でつ、廿六才十一ヶ月」（概写七）とあるから、柏崎日記が絶えた後の嘉永三年十月頃に生れて、柏崎に育ち、兄真吾とともに、維新後、桑名に移り、間もなく若死したものであろう。

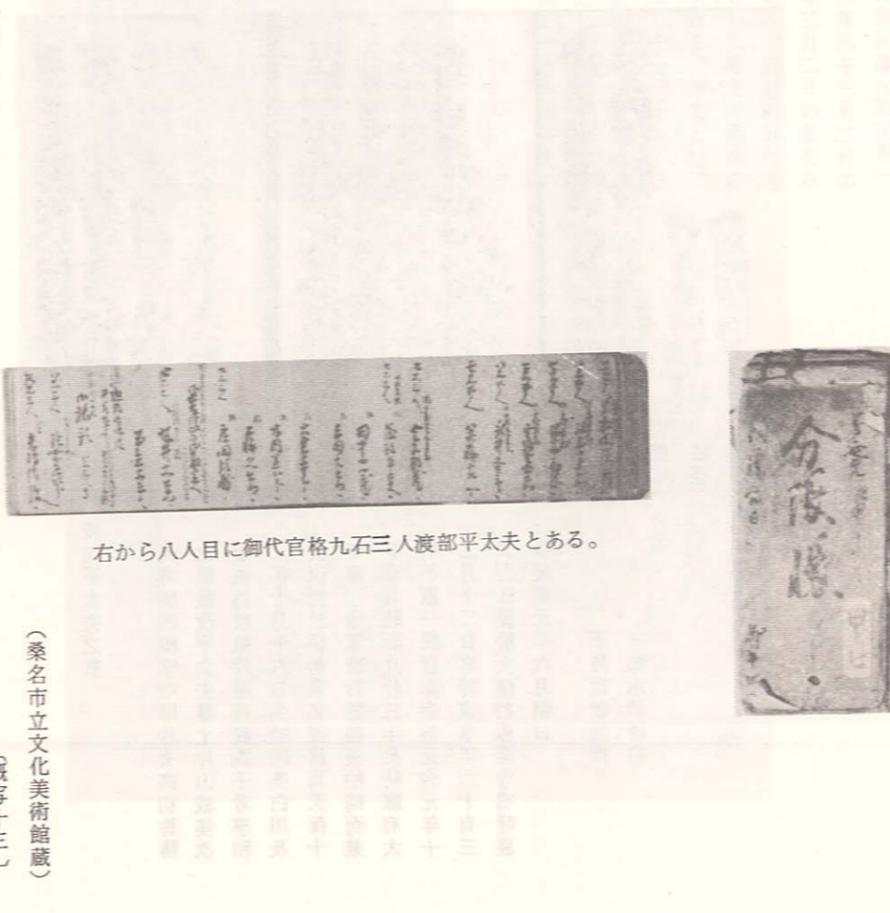
嘉永四亥年十一月九日付の舞台格已下分限帳



右から四人目に渡部平太夫（勝之助）の名がある。

〔概写十二〕

庚申年八月 日の分限帳



右から八人目に御代官格九石三人渡部平太夫とある。

〔桑名市立文化美術館蔵〕  
〔概写十三〕

渡部平太夫政醇の墓と碑文。柏崎市極楽寺



渡辺平太夫之墓

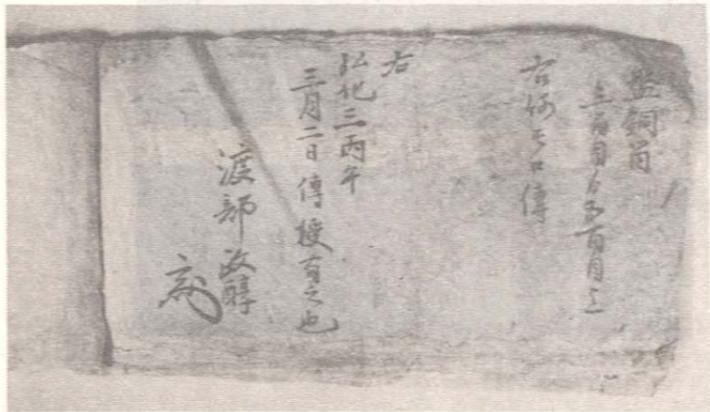
先考諱政醇字中厚号箕齊初称勝之助後改平太夫藩士片山成美次子也為家祖政通所養為子考享和二年十月十六日生於陸奥白川及公復封於伊勢桑名從移焉天保十年奉命掌聽訴於越後柏崎而兼学事其聽訴凡廿三年矣時靡有大刑不戮一民豈非幸哉元治元年十二月十二日卒於家享年六十有三其翌日葬於大窪村極楽寺嗚呼哀哉慶應元年六月朔日

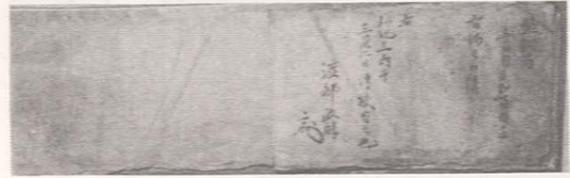
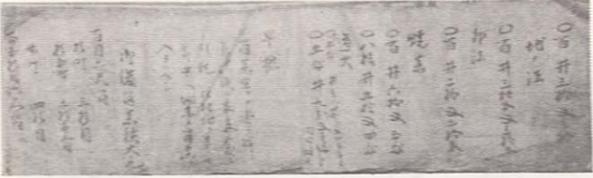
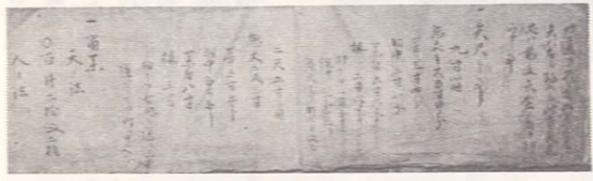
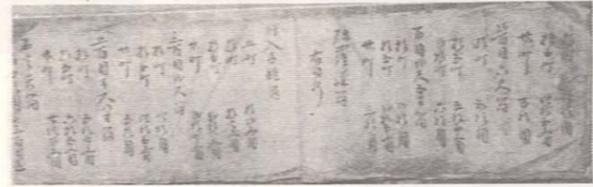
不肖政敏謹撰  
尋知水恭情書

〔概写十四〕

(附)別神文と政醇花押

不破直幹氏の所蔵史料のなかに「別神文御流儀火術覚書」(概写十五)がある。その奥書に弘化三年丙午三月二日の日付がある。一方柏崎日記下巻弘化三年三月二日の条をみると、この別神文のことが認められている。両者は日付も内容も共に、全くびったり一致する。そして神文の最後のところには勝之助政醇の花神も見受けられる。神文とは、桑名日記一、天保十、五、九、天保十二、十一、十九、廿の条等にも見えるように、藩士が藩主に対して、代替りの場合等に、忠誠を誓って署名捺印(時として血判)を行うものをい、別神文とはそれ以外のもので一種の起誓文のようなものを云ったのではなかろうか。





(概写十五)

■桑名の片山家

(イ)片山家系譜

平大夫、勝之助の実家。片山家の旦那寺は円通寺、墓は円妙寺山にあった。

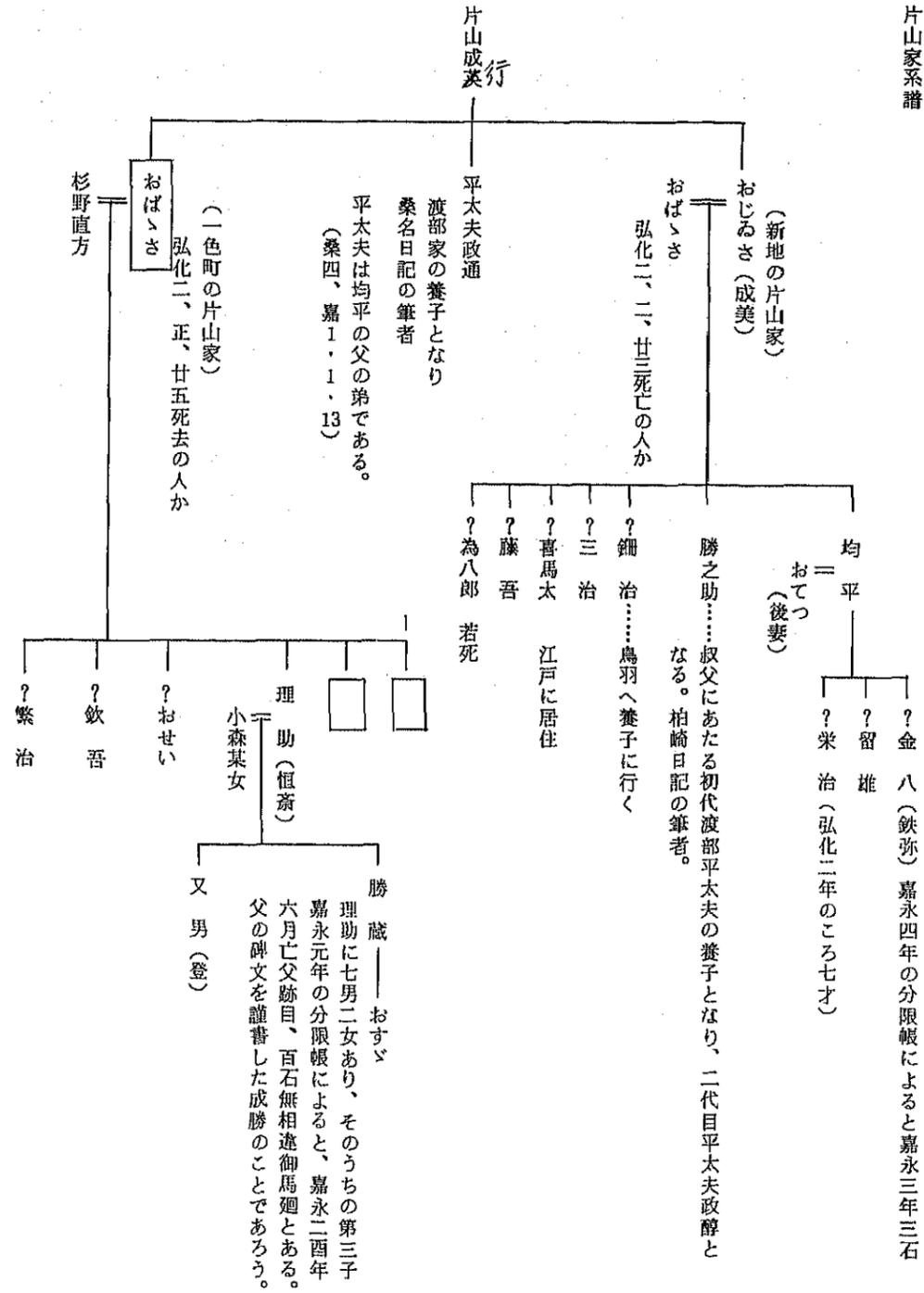
(ロ)均平とおてつ

均平 新地の片山家の惣領。天保八年の頃七石二人扶持。桑四、弘4・3・24に大買物使に昇進とある。短気者で大の酒好き。

おてつ 均平の後妻。夫へ使方互敷、家事取始末も行届とて、米三俵の御褒美をうけている。(桑二、天13・12・26)

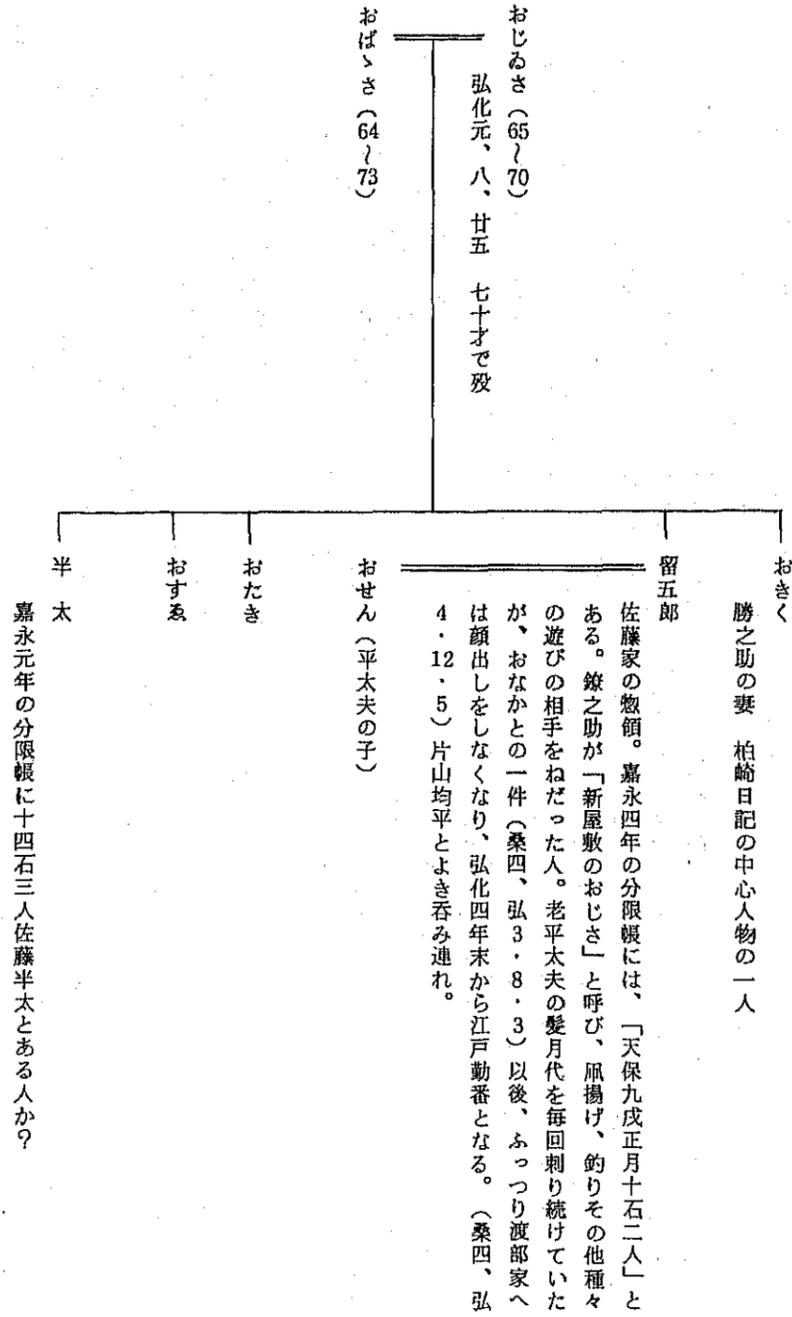
(ハ)理助(恒斎、鉄之助、成器又は器、君舜、箕山、得菴)

今一色の片山家の惣領。桑名日記の中で老平大夫が理助と呼びすてにし、勝之助が柏崎日記の中で片山先生と呼んでいる人。若くして江戸昌平校に笈を負い、後藩校立教館教授になった人。養病漫録、陸奥九家世紀、扈從西上録、その他数々の著者があるが、桑名日記の中で「理助が桑名風土記とか何とか」を著し、その御褒美として金五百疋や上下を藩主から頂戴した(桑三、天14・8・27)というのは桑名志廿八巻のことであろう。嘉永元の分限帳には、「御側役格教授百石 片山理助 嘉永二酉ノ六月朔日病死」とある。墓は円妙寺にあり、碑文は桑名市史補遺(三〇九頁)に収録されている。



IV 桑名新屋敷の佐藤家

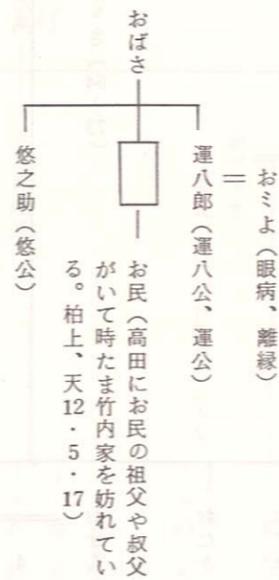
鎌之助の母、勝之助の妻おきくの実家で鎌之助が毎日のように遊びに行き、自分の家同様に振舞っていた家。



V 柏崎の勝之助をとりまく人々

(イ) 御向(隣)の竹内家

柏崎日記で初め御向、後御隣と呼んでいる家。何か事情があつて勝之助よりもはるか以前に桑名から柏崎に移されている家。



御向のおばさは、勝之助夫婦にとっては、柏崎に於ける親代りとも云うべき人で、何かにつけ御世話になった。勝之助も、運公が妻運に恵まれないためもあり、離縁や縁談の度毎に親代りを勤めたり、悠公が江戸行病に罹って柏崎と江戸の間を転々とするので、これも相談役にさせられたりする。おろくも、竹内家には四つ年上ではあるがお民という遊び友達もおり、竹内家に泊り続けたりする。竹内家は真吾を養子にもらいしたが、真吾も時として竹内家の子になるのだといって持ち遊び道具等自分の財産を竹内家へ運んだりする。いはゞ、竹内家は、勝之助一家とは、同一家族のようなつき合いをしている。嘉永四年の分限帳には「嘉永三三月 六石式人 郷手代

格 寄合にて御勤 竹内運八郎」とある。運八郎も維新後帰桑し、明治三年には員弁郡員弁町平古へ入植している。この時平古へ入植した藩士は約三百人をかぞえ、当時の地割の地図(概写十六)が今も平古公民館に掲げられていてその中に竹内運八郎の名が出てくる。が、運八郎も、他の多くの入植者と同様、その後転出したものらしく、現在では、平古に竹内姓の家はないようである。

(ロ) 柳橋のおゆき、ばゞ、久治

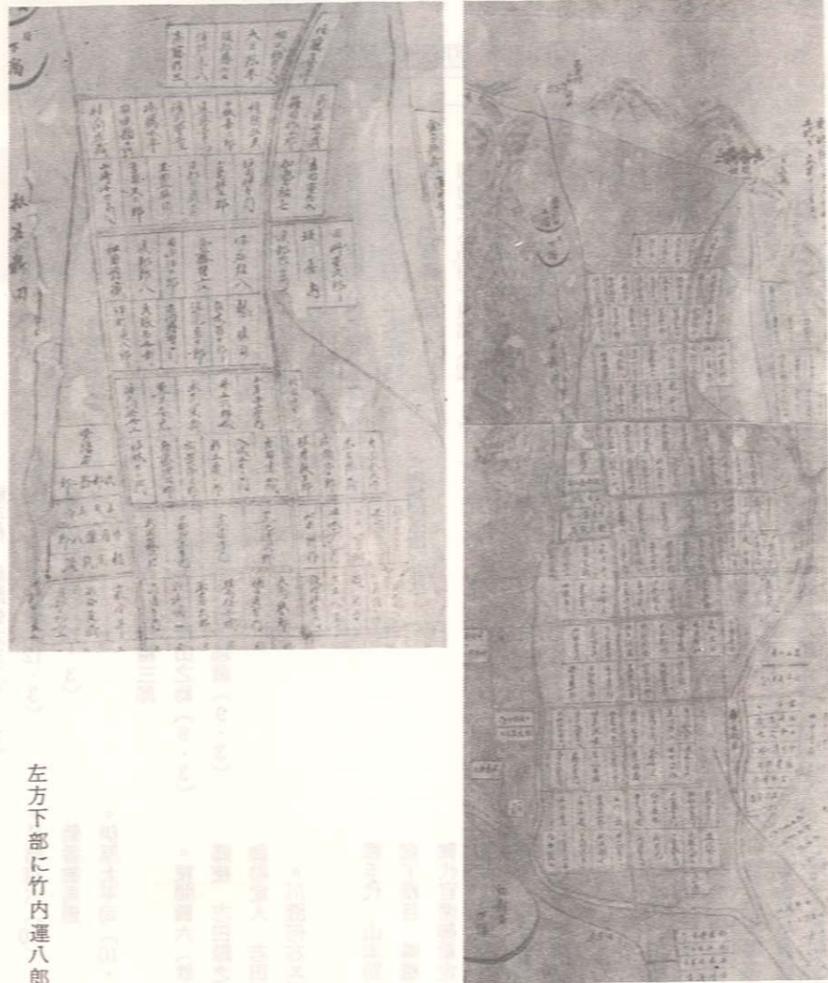
勝之助は極めて廉直で、常に赤貧に苦しんでいたが、藩務は多忙、おきくは病弱、その上子沢山であったため、どうしても子守りが必要であった。入れ替り立ち代り子守りが雇われたが、柳橋のおゆきも、天保十一年三月から、十九才で泊りこむことになった。子守りとしては長く勤めなかったけれども、気だての良い人柄で、子守りをやめてからも、養子(久治)をもらってからも、育太郎をはじめ子供が次々と生れてからも、何かというと、その母おゆひ(柳橋のばゞ)おやきを焼いて売っていた。とりわけおろくをなめるように可愛がった。眼病になやむやせこけた後家)およびその夫久治(勝之助の検見出張の時、貸人として雇われたこともある。なかなか器用でもあり在郷ものには珍らしくあかぬけのした男)と共に、ずーと出入した。

(ハ) 陳屋の面々

日常の交際は、例えば、極楽寺の住職、およびかつて雇った子守りやその家族等を除けば、殆んどが陳屋内に居住する者ばかりの間で行なわれた。

明治三〜四年に平古に入植した桑名藩士の地割表

(員弁郡員弁町平古公民館蔵)



左方下部に竹内運八郎の土地が見受けられる。

(概写十六)



四 桑柏日記比較等

桑 名 日 記				柏 崎 日 記				
<p>おきくも読むことを予想してか、はじめは、ほとんどひらがなで書き、漢字にはふりがなを付したところもある。後半は次第に漢字が増している。おきくはどうかこうか判読できると柏崎日記に認められている。勝之助にだけ知らせればよいことははじめから漢文体で記している。殆んど常用語で書かれているが、白川ことばと伊勢弁が混用されている。ところによってはきわめてまわりくどい書き方がある。</p>				<p>おばは老眼でもあり、老平太夫にさえ読みとってもらえばよいものとして漢字体の俄文が多い。従って文章は比較的簡潔である。所によっては越後ことばも紹介されている。</p>				
表紙々背文書	墨付	日記欠	巻	巻	日記欠	墨付	表紙々背文書	
表表紙 嘉永四年亥三月羽郡昨屋村浄土宗 人別宗門御改帳五冊之内	154枚	自天保10.4.22 至同10.4.末 天保10.9.16 天保10.11.15	一	2月24日 天保十己亥 (1839)	8月6日	自天保10.8.28 至天保10.9.27	229枚 別表紙 1枚	表表紙 嘉永七年甲寅三月越後国羽郡安田村 真言宗人別宗門御改帳六冊之内
裏表紙 嘉永七年甲寅三月越後国羽郡 安田村浄土宗人別宗門御改帳六冊之内	24.1×17 cm	天保11.6.1	9月9日 天保十一庚丑 天保十二辛丑	11月26日				25×16.2 cm
表表紙 嘉永七年甲寅三月国羽郡安田村時宗人別 宗門御改帳六冊之内	118枚	天保13.3.25	二		9月10日 天保十三壬寅	11月27日	自天保14.9.14 至天保14.壬9.10	
裏表紙 嘉永七年寅三月羽郡宮窪村浄土宗人 別御改帳四冊之内	24.1×17 cm		3月18日 天保十四癸卯	12月末日	天保15.6.21 天保15.10.23 天保15.11.25			252枚 25.3×16.2 cm
表表紙 嘉永七年寅三月後国羽 桑村 真言宗人別宗門御改帳五冊之内	143枚	天保14.8.17 弘化元、3.12 弘化元、4.7	三			3月19日 天保十五 甲辰 弘化元	3月22日	
裏表紙 嘉永五年子三月羽郡宮平村浄土真 宗人別宗門御改帳三冊之内	24.4×17 cm (一部 25.2×17 cm)		4月3日 弘化二乙巳	3月4日 弘化三丙午 弘化四丁未 弘化五 戊申 嘉永元 (1848)	3月22日	弘化3.2.14 弘化4.6.12		24.7×15.8 cm
表表紙 嘉永六年丑三月越後国魚沼郡上野 村浄土真宗人別宗門御改	215枚	弘化3.6.22 弘化4.4.14 嘉永元、正、21	四				4月3日	
裏表紙 嘉永六年丑三月国魚沼郡 沢村 禅宗人別宗門御改帳	24.6×17 cm				表紙も含めて 総合計 1360枚			

附 録

時刻(トキ)の早見表等

(1) 年月日は次に掲げる干支(えと)の組み合わせである。

十	子	……	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
			き	き	ひ	ひ	つ	つ	か	か	み	み
			の	の	の	の	ち	ち	の	の	づ	づ
			え	と	え	と	え	と	え	と	え	と

十二支 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

(2) 日記は己亥(天保10)年から戊申(嘉永元)年までの10年間書き続けられた。

(3) 平年と壬年は一般に「平平壬 平平壬 『平平壬 平壬 平平壬 平平』 壬 平壬」の19年を一週期として、くり返されるが、日記の書かれたのは『』内に当る。

(4) 壬年の壬月がどうして決められたのかよく分らないが、太陰暦時代(約1300年間)を通じてみれば、十一月が壬月になったのは極端に少く他の月は大体大差なく壬月になっている。そして壬月は大の月(30日)も小の月(29日)もある。

(5) 一年間の日数は概ね 平年は355日か354日  
壬年は383日か384日 とされている。

そして大の月、小の月は一定していなくて毎年変り、決定するのは前年の10月頃である。

(6) 1日の時刻の割振りや名称等は、第一図、第二図の通り。

(7) 午前と午後を区別するために一般に下記左側の通り特別の文字を頭につけた。

暁 九ツ、八ツ、七ツ  
明 六ツ  
朝 五ツ、四ツ  
昼 九ツ、八ツ  
夕 七ツ  
暮 六ツ  
夜 五ツ、四ツ

(8) 各1時(いっとき)を700分とし、初刻から8刻までに夫々84分を配し、第9刻を28分とすれば1日は8刻×12時+ $\frac{28分 \times 12時}{84分} = 100$ 刻となり曆などで節句時の昼夜の長さを比較表示する場合などに用いた。

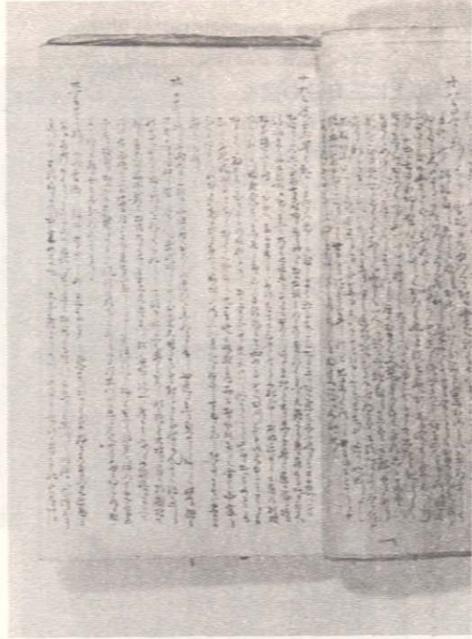
(9) 各1時(いっとき)を10等分し、日そく(日しよく)や月そく(月しよく)の時刻を表す場合等に用いる。〔以上は歴史読本臨時増刊「万有こよみ百科」より多く引用〕

(10) 天体の運行について

太陰暦時代は、天体の運行、異情については特に敏感であった。天保十四年柏崎陳屋の人々の間で噂になった夜空の白雲(柏中天 14.2.19)は、桑名でも観測している。(桑二、天 14.2.10, 同 18, 同 27)〔概写十九〕

とりわけ三日月や望月は、農民漁民をはじめ万民最大の関心事の一つであった。

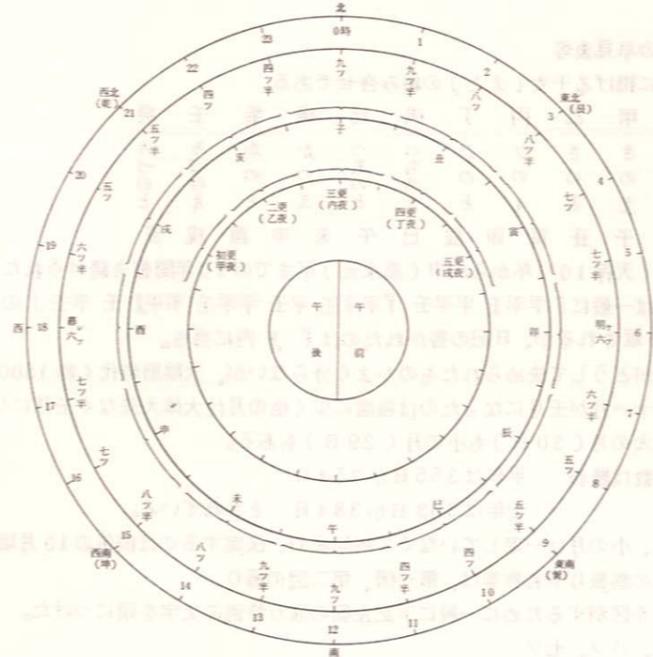
天保十四年から弘化四年に至るまでの四年間に桑名日記上欄に、合計三十七回、三日月の図等が画かれている。〔概写二十〕(桑三、天 14.10.3)には三日月に豆腐を備えて目を煩わめように祈ったこと、又四日月にも豆腐を供え瘡を軽くすませるよう祈ったことも記されている。



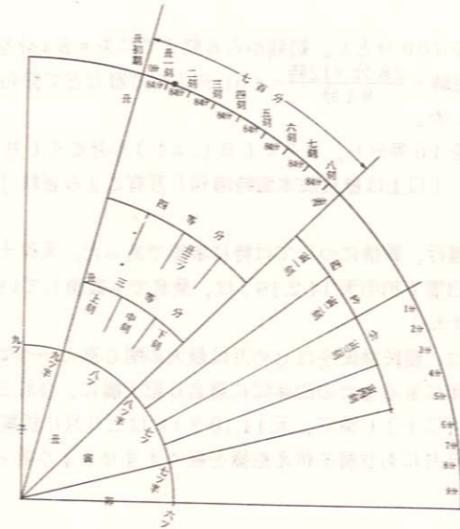
柏崎日記中の白雲の記事天保十四年二月十九日の六行目

桑名日記二の白雲の記事  
 天保十四年二月十日  
 西南間辺より白氣白木綿ヲ引た様見ゆ  
 諸人不思議なりと云。てうど日ノ入候  
 辺より六ツ時分ハ薄く六ツ半過ニ成候  
 得ハ濃く見ゆる、雲とハ違ふなり。  
 同十八日 宵闇ニ成白氣能見ゆ  
 同廿七日 今夜ハ白氣薄く少しよる見ゆ

(概写十九)



〔第一図〕 最外側は方位。  
 最外円は現行時刻を示す。



〔第二図〕 何れの方法で時刻を現わすかは必ずしも一定していない。

解題を刊行した直後（昭和五十九年一月廿七日）のこと、渡部家の御子孫の一つである渡部勇氏（鹿児島県志布志町）に温存されてきた「渡邊氏系図」（三代目平大夫政敏考）の写が、桑名市史編纂室を通じて拙宅まで届けられた。この系図の記事によって、ながい間いだいてきたいろ／＼の疑問点や多くの類推事項が氷解することゝなつた。判明した主な諸点を次に掲げて追記とする。

- 一 嘉永元年三月七日、老平大夫政通が急死すると、その年の九月おぼゞと鐘之助は柏崎に移住している。居候となつていたおなかとその子おすみがどうなつたかは依然不明である。いづれにせよ桑名の渡部平大夫一家は、名実ともに柏崎陸屋内へ移転したことになる。桑名で逐次蓄積されてきた柏崎到来日記もこの移転のとき当然柏崎へもたらされたかと推定するのが妥当であろう。
- 二 おぼゞ（名は既に推定していた通り「増」と判明）は、その後十四年の間命をながらえ、文久二年二月廿六日柏崎で他界（七十才）している。「柏崎市史料近世編5」の同年三月朔日の条の「渡部平大夫（勝之助のこと）御老母不幸・・・」の記事は柏崎での出来事であつたことが判明した。
- 三 鐘之助（多助、政得、碧山）は、嘉永三年九月十一日、式人扶持新郷足輕に召出され、安政二年三石を賜つたが、翌三年八月十九日、おぼゞに先がけ、廿一才の生涯を柏崎で閉ぢている。
- 四 おおきくは、その前に、安政元年十月廿四日、第六子おてつを産むと、その翌廿五日に卅九才で柏崎の土となつてゐる。
- 五 第五子行三郎は、さらにそれよりも前の嘉永四年、五才で夭折

- 六 おおきく、行三郎、鐘之助、おぼゞそして勝之助は、柏崎の西永寺に葬られたが、勝之助の墓だけは遺言によつて同地極楽寺墓地に建立されたものゝようである。
- 七 第二子おろくは文久元年、桑名藩士山田行蔵のもとに嫁したが子を得ることなく、慶応二年廿八才で不届の客となつてゐる。つまり勝之助の子は六人のうち真吾を除く五人までが卅才の声を聞かずに若死したわけである。
- 八 真吾政敏だけは珍らしく長命で、明治維新に際し、その妻子および妹おてつを連れて帰桑するにいたつたのである。そしてその日時は、「そのてあ」第六号の拙論の通り、明治元年八月十一日であつたことも判明した。桑柏西日記もこの日に桑名の地に運ばれたものであろう。
- 九 老平大夫政通の禄高を九石三人扶持と類推したのは間違であつて、弘化三年正月一石の足直りがあつて、最終的には十石三人になつてゐる。
- 十 渡邊氏系図には、家紋が洲浜であること、政通政敏政得政敏四代の花押等々も載せてゐる。

以上

三日の上に三日月の図を  
書き「目を煩め様ニ不相  
替三ヶ月へ豆腐備へる」  
とある。（桑三、天14.10）

月の図なく「月平也」  
とある（桑三、弘元、  
正月）

月の図四日の上に書き  
三日の上に「三日月早  
く入不見へ」とある。  
（桑三、天10.4.8）

三日の上に「三日月雲  
にて不見」とし、四日  
上に月の図を掲ぐ。  
（桑三、天14.6）

〔概写二十〕

月の図を五日の上に写生し、「六ツ半過ニ入」と  
説明している。（桑三、弘元、八）

校訂者略歴



住所 三重県四日市市高花平3丁目1-36番地  
本名 さわ した はる お  
澤 下 春 男  
大正10年4月1日生

昭和17年3月 広島高等師範学校地歴科3年修了  
昭和19年9月 広島文理科大学国史学卒業  
昭和20年9月 復員。引続き兵庫県、愛知県、三重県内の旧制中学、  
新制高校教諭、三重県教委事務局職員、高校々長を経て  
昭和56年3月 定年退職  
現 鈴鹿短期大学講師

校訂者略歴



住所 同上  
本名 さわ した よし ちか  
澤 下 能 親  
昭和22年5月22日生

昭和45年3月 国学院大学史学科卒業  
現 会社員

複写おことわり

昭和五十八年十二月一日 印刷  
昭和五十九年一月一日 発行

校訂者 同 澤 下 春 男  
能 親

〒五一〇 三重県四日市市高花平  
三丁目一、三六番地  
電話 〇五九三、二一、〇六〇八

印刷 株式会社 ぎょうせい

本社 東京都新宿区西五軒町五二番地  
支社 名古屋市中区丸の内二丁目六、一九  
電話 (〇五二) 二二二、〇三二九

桑名日記 四冊 八〇〇〇円  
柏崎日記 三冊 六〇〇〇円  
桑名日記柏崎日記解説 一冊  
志揃 一四〇〇〇円 (含送料)

郵便振替口座 名古屋 七、四〇八〇八番  
百五銀行笹川支店 九一〇〇三 沢下春男名義

桑名市立図書館



0120032818

55  
7